

「同化」してるぜ

齋藤 開

奨励者紹介[さいとう・かい]

日本キリスト教団高槻南平台教会牧師

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(マタイによる福音書 5章43—48節)

「汝の敵を愛せよ」

今日読まれた聖書の物語は、あまりにも有名でこれ以上の解説は必要ないと言えるかもしれません。キリスト教のことをよく知らない人でも「敵を愛しなさい」というイエスの教えを一回は聞いたことがあるかもしれません。キング牧師の説教集には「汝の敵を愛せよ」とありますし、クリスチャンの作家である三浦綾子さんの小説『氷点』にも、最も憎むべき人の娘を育てる夫婦が、葛藤していくということが描かれています。

「敵を愛する」ということは、人間の大きな課題であると思います。私たちもこの「敵を愛する」という言葉をよく聞きますし、そのとおりでと思うわけですが、いざこれを実践するという時に、戸惑いや難しさを覚えるのです。自分の仲間を愛することについては、納得がいきますし、容易いことのように思うかもしれません。しかし、私自身は、自分の仲間さえ愛することができるのか自信はありません。

愛するというのは、大切にすることです。自分の家族や、仲間を大切にすることができるのかと問われたら、必ずしもそうでない自分がいることを思われます。ただでさえ、自分の仲間ですら愛することが難しい、そんな自分に、敵を愛せと教えられるわけですから、イエスにさらに難題をふっかけられているような気さえいたします。

愛敵の教えによるインパクト

「春です、新しいのちです」という奨励題ですが、目に見える命の誕生というだけではなく、先ほどお話したような、新たな自分を造っていく、新たな自分へと成長していくという意味での「新しいのち」という意味で表現しています。

イエス・キリストの「復活」物語

イエスの時代、人々は「隣人を愛し、敵を憎め」と教えられていたようです。これは律法の掟にそう書かれているわけではありませんが、人間の一般常識として定着していたと思われます。隣人とは、イスラエルの同胞、つまり仲間のことです。聖書の神を信じ、神に与えられた掟、律法を守る人たちを愛しなさいということでしょう。そして、それ以外の人々、律法を信じない人、あるいは自分たちを迫害し、敵対する者は憎めと人々は教えられてきたのでしょう。つまり、自分たちと同じものを信じない、あるいは自分の信じているものを否定する人たちは敵であるということであると思います。

それでも、自分に敵対する者を大切に、祈るということをイエスが教えたわけで、これは当時大変なインパクトがあったと思われます。私が同志社大学神学部の学生であった時、今は亡くなられた橋本滋男先生に新約聖書を習いました。橋本先生の授業で最も印象に残ったものが、今日の物語についてのことでした。先生は「敵を愛せと言うが、敵を愛するということは、味方を裏切るということではないか」と言うのです。さらに、この後の「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」という言葉でも、「善人にも悪人にも太陽を昇らせるのは不公平ですよ」と言うわけです。私は確かにそうだなと思いました。今まで、「敵を愛する」ことは素晴らしいことで、神は善人にも悪人にも公平に太陽を昇らせて、雨を降らせて養ってくださると教えられてきたわけですが、橋本先生の問いが私には忘れられない、大切な問いとなりました。確かにそうです。敵を愛することは、味方を裏切ることとなります。イエスの時代においては、隣人を愛するということは、敵を憎むことでありました。同胞の結束を固めるために、一つとなって、敵を憎む。これが同胞愛の証であったかもしれません。さらに神は正しい者にしか、太陽を昇らせないし、雨を降らせない。悪いことをする人や正しくない者には恵みを与えない。これは、イスラエルの同胞にとって当然のことであったわけです。正しくない者に神の恵みなどあろうはずもない。ですから、イエスが敵を愛するという時、それは、人々に衝撃的なインパクトを与え、イエスの教えを排除することにつながっていったのだと思います。

同化しようとする私たち

敵を愛することがなぜ難しいのかと考える時、それは自分が正しいという視点に立っていて、自分の正しさを認めない人、理解しない人、自分に同調しない人は敵であるということになるのではないかと思うわけです。敵が考えを変えて自分に従うまでは愛せないということがあるのではないかと私は思うのです。これを私は「同化」と呼びたいと思います。

イエスが「敵を愛せ」という時、それはまさしく、敵を愛するということであって、敵を味方にするというではありません。敵のために祈るのは、どうか敵が悔い改めますようにとか、どうか敵が減びますようにとか、敵が私たちの仲間になりますようにと祈るのではないのです。もし、敵がいなくなれば、敵を同化して自分たちの仲間になれば、もはや「敵を愛する」という言葉は意味をもたなくなります。イエスが教えたのは、自分とは異質な他者とどう向き合うかだと私は思います。この世界に私と全く同じ存在はない。私と同じ考えを持ち、同じものを好み、同じものを信じる存在はないのです。どこにいても、私と違う他者がいて、それと向き合わざるを得ないということが私たちの現実なのです。

その時に、私たちはそれら異質なものを自分に同化しようと努める時があります。考えの違う他者に変

わることを迫り、言うことを聞かなければ敵として憎むということがあります。そのような私たちの有り様に
対し、イエスは敵は憎むものではなくて、向き合うものであるということを教えています。

味方でなければ敵

2001年にアメリカがアフガニスタンに空爆を行った時、ブッシュ大統領はパキスタンに対し、それを支
持するように要請しました。パキスタンはアフガニスタンと同様イスラームの国ですし、アメリカに対して
いい思いは抱いていませんでしたから、それを断るわけです。すると、当時の米国国務副長官であったアー
ミテージという人が、「アメリカに味方しないなら、石器時代に戻る覚悟をしておけ」と言ったそうです。つ
まり、アメリカの味方でなければ、敵であり、パキスタンを空爆すると脅したのです。

味方でなければ敵である。この課題は、私たちにも突きつけられています。味方が敵か、右か左か、日本
人か外国人か、戦争か平和か、この二者択一でしか私たちはものを考えることができないのでしょうか。
私たちは、自分とは異質なものと対峙する時、敵となるのが嫌ならば、相手に同化しなくてはなりません。
自分の大切なものを捨ててまでです。

私たちの歴史と同化

私は日本キリスト教団大阪教区の委員会などで、沖縄とかかわることが多くなりました。沖縄は琉球王
国という独立した国でした。琉球語という独自の言葉を持ち、文化をもっていました。ところが、1609年に
薩摩藩が琉球を侵略して以降、明治時代には、日本語を話すことが強制され、天皇の民として、日本に
同化することを強制されてきました。自分たちのアイデンティティの放棄を迫られ「日本人」にされたので
す。これは沖縄だけでなく、アイヌの人々も同様であると思います。

私たちは歴史の中で、他者を同化し続けてきたわけです。時に人間は神すら同化しようとしています。「神は
私たちの側にいる」。「私たちこそ神の教えに忠実である」。絶対的に他者である神ですら、自分の中
に取り込んで、それを相手に押しつけようとするのです。

他者を他者として向き合う

そのような私たちが、完全に違う他者とどう向き合うのか、他者を自分の中に統合するのではなく、他者
をそのままの存在で大切にすることができるのか問われていると思います。相手に変わることを要求する
のではなく、他者をそのまま愛することができるか。イエスは私たちに問うています。異質な他者との出
会いは避けることができません。自分以外は皆他者だからです。他者を他者としてその存在と向き合うと
いう課題に私たちはどのように答えるか、考えつつ歩みたいと思います。